

## (1) 親子療育の現状と課題

### —TEACCH<sup>®</sup> 早期療育の視点から—

川崎医療福祉大学大学院医療福祉学研究科医療福祉学専攻修士課程 ○菟原 彩

【背景・目的】親子療育は、1歳6か月健診で発達のリスクが指摘された子どもとその家族が繋がる最初の療育の場である。早期発見から診断までの時期にあたり、母親としては、子どもの行動特性によりわが子の行動や気持ちが分かりづらい、子どもへの適切な対応が難しい、加えて周囲の理解が得られにくいなどで、日常的な強い育児不安やストレスを感じていると言われている。TEACCH<sup>®</sup>の考えでは、療育の初めから親とスタッフが協働していくことが重視されている。家族自身が子どもを理解し、子どもへのかかわり方を知ることが重要といえるが、親子療育の実態は様々である。そこで親子療育の実態把握と課題を明らかにすることを目的とした。

【方法】一次調査としてA県内の児童発達支援事業所、要経過観察児指導教室に質問紙調査を実施した。二次調査は調査協力を得られた機関8か所に対し半構造化インタビューを実施した。

【結果】一次調査：173部発送117部回収（回収率：67.6%）うち親子療育実施は22か所（20%）であり、

実施が少ない現状が明らかとなった。療育の特徴を見ると、「家族が同じかかわりを持つ機会」があるのは26%と少なく、「社会性の発達を促す機会の提供」については、重要と捉えられているが、実施は60%にとどまる、ということがあった。

二次調査：家族との協働の実施率が高い4か所のスタッフは、インタビューの質問に対し、親を主語に答えることが多く、親の視点を取り入れていることがうかがえた。

【考察】親子療育の実施が少ない現状は、家族が子どもを正しく理解する機会の少なさに繋がっているのではないかと考えられる。また親子療育実施機関でも、家族が実際に療育に参加して学ぶ機会の提供は十分ではない。比較的好く家族との協働を実施している機関は、親を中心とした視点を取り入れていることがみられた。今後、家族の具体的な参加の仕方を検討していくことが、家族との協働に繋がっていくのではないかと考えられる。